

通具本伊勢物語の本文について

山 田 清 市

鉄心斎文庫蔵、通具本伊勢物語の出現については、その伝本史上における画期的意義について、複製本解説の拙稿で詳細に論述を試みたところであった。(昭和四十二年六月 叢地書館刊)

本稿ではその内部本文について、いささか考察を加えてみたい。但し書写過程における明らかな誤りと目されるものや、その本文上の異同が、対校本以外の他系統の定家本と一致を示すような箇所等は対象とせず、従来、定家本を中心とする本文解釈において、疑義の存するような箇所の本文異同を中心に検討してみたい。伊勢物語伝本の原形再建作業とともに、その本文への探究は、今や規範化した観のある定家本本文をのりこえて、さぐらねばならぬ課題となっているからである。

(注) 以下表示の章段数は便宜上定家本の章段を示し、符号(A)は通具本本文、符号(B)は定家本中の武田本本文(拙著古典文庫刊を示す)。

章段	A (通 具 本)	B (武 田 本)
3	ひじぎといふものをやるとて	ひじぎもといふ物をやるとて

右のごとく、通行本は多く「ひじぎ」(海藻)を「ひじきも」としている。本来和名は「ひじき」であるが、又「ひじきも」という別称も存在するから、原形本文はいずれとも決しかねるが、大和物語に、伊勢物語の右章段と同一事項を記した百六十一段の該当本文に

ひじぎといふものをこせてかくなむ

と記している。(但し御巫本…ひじきも)

勢語の成立に最も接近しているとみなされる大和物語において、この章段が後の付載でなければ、その内容が勢語と殆んど同一事項を記載している点において、両者の密接な関係は疑うべくもないが、その成立の近接を重視すれば、勢語本文の原形も、通具本の示すごとく、大和と同様に「ひじき」でなかったかと推定される。

しかも形態的に定家本系に対立する広本系の、大島本・阿波本・一誠堂本・泉州本・塗籠本等が期せずして「ひじき」であり、よって通具本固有の脱落とはみなしがたく、むしろ、

ひじぎといふものをやるとて

の「も」が誤って添加されたか、或いは次の

ひじきものには袖をしつゝも

という歌句の第四句の「も」が目移りによって、誤入されたという過程がそこに考えられるのである。

17	A	きえずはありとはなとみましや
	B	きえずは有とも花と見ましや

右はその上句に

けふこずばあすは雪とぞふりなまし

につづく歌の下句である。通行本の「有とも」では字余りであるが、この歌は古今集にも業平歌として掲出されている。

古今集伝本によれば、「も」を記載しないものは、私稿本・筋切本・元永本・永治本・前田本・天理本等であり、

「も」を記載するのは、基俊本・静嘉堂本・雅俗山庄本等で、(古今和歌集成立論資料編) 古今集でも古形を存するとみなされる伝

本には多く「も」を記載していないのである。

伊勢物語伝本でも「も」を記載しないのは、広本系の大島本・神宮文庫本・阿波本・塗籠本等であり、定家本系では天理大承政筆本一本のみで、これは同類本に記載をみるから脱落とみなすべく、よって通具本と広本系のみとなるが、形態的に定家本系に先行するとみなされるこれら勢語伝本と、前記古今集伝本とが「も」を記載しない点を勘案すると、勢語の原形本文に「も」の記載がなかったという推定は、十分根拠のあるものとなるであろう。

26	A	むかし五条わたりなりける女を えゝずなりにけることゝ わびける人のかへりごと
	B	むかしおとこ五条わたりなりける女を えゝずなりにけることゝ わびたりける人の返ごと

右の本文は、古来、難解な個所の一つになっていて、例えば「大系」の注にも二説をあげて

(1) 男が嘆いてある人に言つてやったが、その人からの返事に。

(2) 一説、嘆いて言つて来た人に対して、男のやった返事に。(古典文学大系)

として、いずれともとれることを掲げている。即ち、通行本は「おとこ」が記載されているため、「わびたりける人」は「男」と別人となり、「わびたりける人の返ごと」が「男」との呼応において、しっくりせず、補足して「同じ心に嘆いてくれた人」というような解釈を与えている現状である。

ところで、見るごとく通具本本文には、「おとこ」が記載されず、且又「わびたりける」は「わびける」になっているのである。したがって、通具本本文によって解釈すれば、

昔、五条あたりに住んでいた女を、ついに手に入れることができないで、終つてしまったよ、と嘆いてきた人への返事に

となり、すつきりと前記の(2)説が成立するのである。

しかして「男」が通具本の脱落でないことは、広本系の大島本・神宮本・阿波本等も又「男」を記載しないことによつて伺われるところである。勢語がどの章段も大体「昔男」という表記法で始まる形態を有するところから、「男」の脱落とみて、後に補足した結果の異同かと疑われる。勿論、意味が通じ易いからとて、安易にそれに依拠し、正当化することは慎むべきである。だがしかし、定家本を絶対視し、それから脱け出し得ない態度も又、より危険である。

右歌句の第二句「すぐる月ひと」の「月ひ」が、通行本では「よはひ」になっているが、その異同については、誤写過程からは考えにくい。それが又、通具本の改変本文でないことは、広本系の大島本・一誠堂本、それに肖柏本の一致を見ることから知られるところである。この歌を含む三十段には

50	A	B
ゆくみづとすぐる月ひとちるはなと いてづれ まてふことをきくらん	行みづとすぐるよはひとちる花と いてれま てふことをきくらむ	

(男)……
 とりのこをとをづゝとをはかさぬとも
 おもはぬ人をおもふものかは

(A)

(女)……
 あさつゆはきえのこりてもありぬべし
 たれかこのよをたのみはつべき

(男)……
 ふく風にこそぞのさくらはちらずとも
 あなたのみがた人のこゝろは

(B)

(女)……
 ゆくみづにかずかくよりもはかなきは
 おもはぬ人をおもふなりけり

という二組の贈答歌形式によって構成されたあとに、前記の歌が、女の返歌もまたぬ形で最後に一首だけ記載されているのであって、よって形態的にはこの一首が贈答形式をはなれており、そこに後の付載を伺わせるのである。

そのことは歌の内容に即して見るも、前記二組の贈答歌が、たのみがたく、あてにならぬ人の心をふまえた形で、組合わされているにかかわらず、最後のこの一首のみは、それらにかみあつていかないことによつても、十分考えられるところである。この一首が、

そうした性格づけを帯びていることに注目するならば、そこには、待つことを聞き入れるべくもなく、流転していくものとして通具本本文には「流れゆく水と、過ぎ去る月日と、散りゆく花」とがならべ掲げられたのであり、いずれも自然の営為のなかに見すえられた無常性への詠嘆の素材である。

しかして前記四首の贈答歌には自然詠のなかに人間との連繋が、(1)の「おもはぬ人を」、(2)の「たれかこのよを」、(3)の「人の心は」(4)の「おもはぬ人を」という語句の使用によつて、分ちがたくむすびこめられているのである。

即ち最後の一首をそれら四首への橋梁とするために「月ひ」の本文を「よはひ」に改変せしめたのではなかつたかという推測が強く横たわるのである。

62	A
こけるがごともなりにけるかな	B
こけるからともなりにけるかな	

右は上句に

いにしへのにほひはいづらさくらばな

を持つ歌の下句にあたる部分である。通行本は第四句の「こけるから」を「抜ける幹」に当てて、「むしりとり、しごき落した幹」と解しているが、この歌は、かつて文情のあつた女と久しぶりの対面をした男の感懐であり、その女

を「しごぎ落した幹」というようなきめつけた無惨な形容で表わしていることになるのである。

しかしそのあとにつづく男の態度は、更に一首の歌を詠んで

これやこのわれにあふみをのがれつゝ

とし月ふれどまさりがほなみ

と己れからのがれ去った女でありながら、年月がたっても一向に幸福になつた様でもないことを気の毒がり、「きぬぬぎてとらせ」という男の態度にひきつがれているのであつて、怨恨を懐旧の中にとかしこみ、情趣と愛の心情を忘れぬ男の心象を指向していることが伺われる。

とするならば、通行本の前記本文では、その心象に分裂を来すことになるが、通具本文のごとくであれば、「抜けるが如も」となり、「しごぎ落したように、やせ細ってしまったことよ」となつて、女への憐憫がこもる言葉になるわけである。だから女の方も又「涙のこぼるるにめも見えず、物も言はれず」という描写によつてうけとめられているのである。

思うに前記の「こ」と「ら」の異同は、「こ」の連綿体から「ら」に誤写された過程が十分考えられるところであり、通具本の誤写とみなされないことは、広本系の、大島本・神宮文庫本・一誠堂本・阿波本が通具本に一致を示すことから看取されるところである。

69	A	B
ゆめうつゝとはよひときだめよ	ゆめうつゝとはこよひきだめよ	ゆめうつゝとはこよひきだめよ

右は伊勢齋宮狩使の段における男の返歌

かきくらす心のやみにまどひにき

につづく下の句である。周知のごとく、右は古今集に「業平」として記載をみるものである。ところで、古今集伝本も異同個所の「こよひ」が、通具本のごとく「よひと」になっているのは、久海切・大江切・志香須賀本・元永本・六条家本・後鳥羽院本等であって、比較的古形を伝えるとみなされるものに多く記され、又勢語も広本形の大島本・神宮本・阿波本・一誠堂本・谷森本のほか肖柏本・時頼本・最福寺本・七海本等も又「よひと」と記すのであり、古今六帖四の同歌も又「よ人」である。

ところで大島本のこの歌の注記に

「或本にはこよひさだめよとあり。こよひさだめよといふやよからむ。さばかりのみそか事をへ、たれ人のしりてかさだむべきとなんふるき人のいはれし」

と記すのである。とするならば、そのように意味上の全理性に叶う語句を、何故に「よひと」に改変する必要があるであろうか、むしろその反対にこそ、改変の理由は見出されるのであるまいか。この一首の意図は注記にあるごとき点にのみあるのでなく、上の句にこそ力点がおかれているようであって、「よひと」を「余人」の意に解するならば夢のような逢瀬のはかなさに私は悲しみにとざされた心の闇にくれて、すっかり迷い乱れております。それが夢の中のことだったのかそれとも現実の事だったのかさえ、見きわめがつかぬ程ですから、他の人よ、それを見定めて下さい。

という解釈が成立するのである。前述の如く古今集や、古今六帖、勢語伝本に見る「よひと」本文の記載と相待つ

て、通具本が勢語伝本中の先行形態を物語る点からも、「よひと」本文の方が原形を伝えていることの可能性が大きいのである。

79	A	B
これはさだかずのみこ ときの人中将のこと なんいひける	これはさだかずのみこ 時の人中将のことなむ いひける	あにの中納言ゆきひらのむすめのはら也

通具本にはみるごとく、終りの注記的な「あにの中納言ゆきひらのむすめのはら也」という本文が存在しない。これは脱落か、付載かのいずれかであろうが、本文中の「さだかずのみこ」によってその誕生と生母は

貞観十八年三月十三日辛卯。皇子貞数為親王。年二歳。母更衣文字。参議太宰権帥従三位在原朝臣行平之女也。

(三代実録二十八)

という記事から、貞観十七年、行平の母、更衣文字腹出生であることが伺われる。

大体勢語本文に注記的文の混入と認められる個所は、その性格上終語が「なり」で終わっている要素の多いことが認められ、例えば

- [3] 二条のきさききのみだみかだにもつかうまつりたまはでたゞ人にておはしましけるときのことなり。
- [39] いたるはしたがふがおほぢなり、みこのほいなし。
- [65] おほみやす所はそめどのきさききなり、五条のきさききとも。

さい宮のみやなり。

等、いずれもその章段末尾にあり、それらが注記的混入を伺わせるものとして従来から考えられていたところである。

したがって通具本に存在しない前記の本文も又、右の条件に適合する点で、注記本文の混入とみなされるのである。

しかしして通具本の欠脱とも考えられないことは、参考伊勢物語に屋代弘賢が所引の「為家本」にも右の部分が存在していなかったことを記す点において、後世の補入と推定されていたこの本文部分は、今、本文の実証として認め得る結果をもたらしたのである。

86	A	B
むかしいとわかきおとこ わかき女 あひいへりけり		むかしいとわかきおとこ わかき女を あひいへりけり

みるごとく通行本には「わかき女を」と「を」の一字があるために「あひいへりけり」が難解となってくるのである。

ところが通具本本文には「を」が記されていないために

若い男と女が互いに夫婦の語らいをしようと話しあっていた

となり、したがってそのあとにつづく本文、

おのくをやりければつゝみていひさしてやみにけり

にもびつたり適合するものとなるのである。勢語伝本にはすべて「を」を記載するが、前項にあげた「弘賢」の「参考伊勢物語」所引の「為家本」にも「を」の記載を持たないことが記され、注目されることである。

為家本は通具本と一致する本文を間々存するが、それが為家自筆であったか、旧伝のものであったか知るよしはないとしても、ほどそのころの書写であったことが伺われ、弘賢の「参考伊勢物語」に

二つには中院大納言卿の筆にて、黄門卿の手をへざる本を写されしを、檜山坦齋がわれに贈りしなり。

と記すごとく、定家本系でない意味においては、通具本と同様であり、よってその本文の一致は特に注目されるものとなるのである。

87	A
わがよはひけふかあすかとまつかひの なみだのたきといづれたかけむ	B
わが世をばけふかあすかとまつかひの 涙のたきといづれたかけむ	

右は、業平の兄、行平の詠んだ歌であるが、第一句を通行本に記すごとく「わが世をば」によって解すれば、「自分の世に時めく時世を今日か明日かと待つ」心を表わす意味になるが、右歌句の前には

そこなるをみる人にみなたきのうたよますかのゑふのかみまづよむ

と記されているごとく、人々に囲繞された中で、最初に口をきるといふ条件が行平に設定されているのである。そうした立場で、開口一番「自己の栄える時世が今日くるか、明日くるかと待っている」というきり出し方は、いかにも

名利への執着をむき出しにした詠み方として、まことに、風流を殺ぎ情趣を解さぬ態度と評されねばならないであろう。

しかし通具本本文によれば、

年老いたわが齡故余命のほども今日が限りか明日が終りかと、待つ間の悲しみの涙とこの瀧と、いずれが高いであろう

という歌意になるのであり、前記の立場とは全く異つてくるのである。同じ行平の歌が、芹川行幸の定家本百十四段にも

おきなさび人などがめそかり衣

けふ許とぞたづもなくなる

と記され、迫りくる老齡の悲痛さをにじませている歌境にそのままつながつていることが思いあわされるのである。

87	A	B
	かたへの人わらふことにやありけむ このうたにてやみにけり	かたへの人わらふ事にやありけむ このうたにめでゝやみにけり

右の本文は業平が布引の滝のもとで詠んだ歌のあとにつづく文で、「わらふ事」と「めでゝ」の関係が不明で、従来、注釈にもさまざまに私案が提示されてきたのである。本文にも推測批判を加え、「めでてやみにけり」を「めでてや、やみにける」の誤脱と考え、それが「笑ふことにやありけむ」と併列していると見なし、二つの理由いずれか

であろうか。(伊勢物語新解明治書院)と記されるごとく、難解な個所であった。広本系の大島本・阿波本・神宮文庫本・塗籠本等は「このうたにめでて」を「このうたをよみて」と記するのであるが、それでは前後から意味が通らなくなるのである。

ところが通具本本文のみは、それらの疑点をおこさぬものを提示しているのであって、よって、その本文によると、

傍らの人々はこの歌について笑いぐさと感じたことであろうか、この歌だけでやめてしまったのである。という解釈がすっきりと成立するのである。

94	A	B
秋のよはゆるひわするゝものなれや かすみにきりやたちへだつらん		秋の夜は春日わするゝものなれや かすみにきりやちへまさるらむ

右は始め交情のあった男から女に絵を頼んでやったが、女は新たな今の男が来ているからと、一、二日よこさなかつたので、男が恨んでやった歌として記すが、その第五句に異同を持つことはみるごとくである。通行本本文では下の句は

過去の霞となった私のことよりも、目の前に立つ霧のお方が、はるかにまさるのでしようね、
 となるが、通具本本文に従えば、

今は過去となった霞の私をおしかくそうと、秋霧のお方が二人の間にたちはだかり、へだてるのでしようか。

となつて、両者ともに歌意は通るものとなるのである。ところで、大島本・神宮文庫本・時頼本・伝良経筆本等は「ちへまさるらん」が「たちまさるらん」とあり、これは「立」の草体が、かなの「ちへ」に似ているために生じた誤写過程が考えられるので、「たち」が先行するとみなされるのである。「へだつ」と「まさる」とに關してはいずれが先行形態か、これだけでは判定できがたいところである。ところで古今和歌六帖五にも同歌が記載され、

秋のよの春ひわするゝものなれや

かすみにきりやちへまさるらん(青陵部藏
御所本 桂宮本)

とあり、勢語の通行本本文と同一である。但し第一句を「秋のよの」と誤写しており、且、その書写が近世のものであるため、六帖原本の本文であるかどうかという懸念も存在するが、一応、原本の本文を伝えるものとみなすならば、六帖と勢語の本文關係についての検討では、六帖の典拠本文は通行本系でなく、広本系に近いものであることを知り得たのであったが、(拙稿「伊勢物語の成立と古今」
和歌六帖「附三八語学紀要」) 現存広本系と通具本との比較に關する限り、明らかに通具本が先行するので、広本系の原本の成立が六帖以前にさかのぼり得るならば、通具本の原本の成立は更にそれ以前にさかのぼることも考えられ、別に詳論の機会にゆずるが、或いは天曆のころまでさかのぼり得る可能性を伺わせるのである。

すでに通具本解説でふれたことであるが、

さくらばなちりかひくもれおいらくの

こむといふなるみちまがふがに

という行平歌を通具本原本は含まぬことよつて、すなわちそれを業平歌として誤写した古今集伝本が出現する以前に成立していたとみなされること等が、前記の推定をささえる一証になるのである。

103	
A	B
みこたちのつかひ給ける人を あひいへりけり さて あしたによみたりける	みこたちのつかひたまひける人を あひいへりけり さて

みるごとく、通行本には「あしたによみたりける」の本文を有さない。ところで右章段に記載の歌は、古今集十
 三、恋三に業平歌として記載を見るところであって

人にあひてのあしたによみてつかはしける

ねぬるよのゆめをはかなみまどろめば

いやはかなにもなりまさるかな(志香須賀本)

と記すのである。即ち古今集の詞書本文は、通行本にない通具本本文にそのまま適合するのである。古今集の右の詞書はその典拠を、業平集、もしくははその物語化に近いものによって記載されたとみなされるが、いずれにしてもその原形本文に近いものとどめていることは疑いないところである。よって通行本にその影を全く落していないことは、典拠のそれと断絶を意味することであり、むしろそこに脱落を思わせるのである。

市 清 田 山
 は、典拠のそれと断絶を意味することであり、むしろそこに脱落を思わせるのである。
 山 田 清 市
 のである。

第一に勢語本文において、その成立に当って古今集による形成は随所に指摘できるところであるが、一旦成立した

後、付載の独立章段を除き更にその本文内部に古今の詞書によって後に増補された形跡を持つとみなされる部分はこのれをいずこにも見出し得ないことである。

第二に勢語の本文表現上の特質として、同じ語句・連語の繰り返しの多いことは文体上の一つの特徴であるが、それのみでなく、各章段前後の描写中にも同類の表現手法の反復がみられることであり、問題の章段前後にも

一〇二段 もとしぞくなりければよみてやりける

一〇三段 さてあしたによみたりける

一〇四段 おとこうたよみてやる

とみるごとく関連した類似の記述法がみられる点からも、そこに本来から存在した本文であったことを伺わせるに足るのである。

第三にこの本文が通具本独自のものではなく広本系の阿波本・神宮文庫本・塗籠本それに肖柏本等にも記載を見る事実である。このことは決して通具本独自の恣意による増補でないことを裏書するのである。

以上によってその内容形態面の考察からも前記本文は勢語の原形に本来から具有されていたものであったことを伺わせるのである。

107	A	B
<p>おとこいといたくめでういまよで まきてふみほこにいれて ありくとなむいふなる</p>	<p>おとこいといたうめでういまよで まきてふみほこにいれて ありとなむいふなる</p>	

右は業平のもとにいた女のもとへ藤原敏行が言い寄り、業平の代作とも知らず、その返歌に感心した敏行のさまを記した個所であるが、「ふみばこ」と「ふばこ」の違いは意味上に異同はきたさないが、「あり」と「ありく」では決定的に違ってくるのである。

思うに能書で令名高い敏行が、歌もろくに詠めない女の幼稚な筆蹟と秀逸な歌句との断層に気づかない筈はないが、そんなものに感心している鑑識力もない敏行を描いているところに勢語作者の戯画化趣味が伺われ、だからこそ、そのあとに更に業平の代作によって仰天した彼をして雨の中を

みのもかさもとあへでしとどにぬれてまどひきにけり
という諧謔描写につないでいるのである。

即ちそこに敏行に対する諷刺的なものさえ感じられるのであり、とするならば、前記の「あり」よりも「ありく」の方が、「まどひきにけり」と同様、その動的効果においてよりまさる本文といえるのである。単に保存するだけなら、文箱などより厨子の方が適切な感じをいだかせるが、「ありく」という本文条件への符合のために、当然「文箱に入れて」という記述をともなったことも考え合わされる所である。

しかしてこれも又、通具本固有のものでなく、広本系の阿波本・神宮文庫本・大島本(ありい)も同一本文を有し、塗籠本は更にはつきりと

ふみばこにいれてもてありくとぞ

と記すのであって、通具本独自の恣意的改変でないことが知られる点などからも「ありく」の本文が原形でなかったかと考えられるのである。

114	
A	B
いまはさることにはげなくおもひけれども つぎにけることなれば おほかたのたゞひとにて さぶらはせ給ける	いまはさる事にげなく思ひけれど もとつぎにける事なれば おほかたのたかがひにてさぶら はせたまひける

右は芹川行幸の段の本文であるが、みるごとく通具本は通行本の「もとつきにける」の「と」がなく、且「おほかたのたかがひ」が「おほかたのたゞひと」になっている。塗籠本には前者の「もとつきにける」の「もと」が存在しない。後者の「おほかた」という通具本本文に一致するのは、大島本・泉州本・塗籠本・最福寺本・皇太后宮越後本・真名本等であるが「おほかたのたかがひ」では意味が通じなくなる。ところが通具本は「たかがひ」が「たゞひと」となっているため、次のような解釈が成立するのである。

即ち「たゞ人」は勢語三段にも

三条のきさきのまだみかどにもつかうまつりたまはでたゞ人にておはしましける時のことなり

の用例が示すごとく帝・后に対しては「臣下」の意になり、したがって通具本によれば、

今は老齢で狩のお供などは不似合に思ったけれど、お供に加わっていたことだから、普通の臣下として、お供におつかせになっておられた。

という解釈が無理なく成立するのである。この時の記事は後撰集にも記すが、勢語通行本本文の如く行平が「鷹の匠」であった記述は全く無く、それを物語的虚構とみなしても、この時、行平は七十歳前後であり、老齢の悲痛さを

たゞよわすところの

おきなさび人などがめそかり衣

けふ許とぞたづもなくなる

の歌を詠ずる身として、大鷹の鷹飼の職務を担っていることは、通具本の「普通の臣下」という自由な立場と比較して不自然の感じをいだかせられるのである。

即ち勢語の古形をつたえる諸本が「おほかた」である点より推して、「おほかた」が原形を伝えるものならば、次の「たかがひ」では意味が通じなくなり「たゞひと」と記す通具本本文の優位性をそこに思わせられるのである。

117	
A	B
むつまじと君はしらじなみづがきの ひさしきよゝりいはひそめてき	むつまじと君はしら浪みづがきの ひさしき世ゝりいはひそめてき

右は帝、住吉に行幸のおり、住吉大神が現われて詠まれた歌として記すが、契沖は既に

「君は業平をさしてのたまへり。君はしらずやと云こゝろに、しらなみとつゞけさせ給へるは、みづがきの瑞を水になして、水より波は立てば、つゞけさせ給ふにや。然らねば白浪のことは、いかにも心得られぬことなり云々」

(勢語應断)

山田清市
と疑問を提示しているが、通具本によれば、問題の個所は「しらじな」であって、右の如き疑点は解消するのである。

通具本に一致する本文として、泉州本、為家本(参考伊勢物語)、最福寺本等があり、「しらずや」とするものに、阿波本・神宮文庫本、それに奥儀抄、袋草子があるのは注目される。「白浪」がゆるがぬ原形本文でなかった傍証になるわけである。

思うにその書写において「しらしなみづがきの」の本文の「ら」から「な」への書写過程で中間の「し」が、「ら」の連綿から「な」へとつづく時に「し」が見落されて次の「み」が書写されたために「なみ」という本文が生じたであろうことが極めて自然に推定されるのである。

120	A	B
むかしおとこ女のまだよへずとおぼえたる ひとつのもとにしのびてものきこえてのちほど へて		むかしおとこ女のまだよへずとおぼえたるが 人の御もとにしのびてものきこえてのちほど へて

右の文は通行本のままでは諸抄の注解なしにはその意味は容易にとれないであろう。真淵も「物きこゆると聞きて後とか、又物いふと聞えて後とかありつらんを、語の落ちたるならん。今の如くでは詞足らず」と疑問を提示している通りである。

事実、通行本の如く「おぼえたるが」の「が」という格助詞の存在によって、「女の………たる女が」という同格表現となり「まだ男女の仲を経験しないと思われた女が」として、且「御もと」の「御」の記載によって、以下を「他の身分高い人とひそかに心を通わし申上げて」と訳するとしても、そのあとの「のちほどへて」とのつながりに

たしかに飛躍しているものを感じるわけである。しかし通具本本文によれば、「が」と「御」がないために昔、男が、ある女でまだ男を知らないと思われたその人のもとへ、ひそかに語らい逢って後、よほどたつてからとなり、無理な補足を必要としなくなるのである。

尚「御」の字は塗籠本・伝慈鎮為家筆本・最福寺本等に存在しないことが注目される。「が」の記載を持たないのは、七海本・伝慈鎮筆本であるが、この両者は定家本系で、伝本の性格上、その系統からうけつがれたものでなく、誤脱による結果とみなして大過ないであろう。

122	A	B
やましろのゐでのたまみづてにくみて たのみしかひもなきよなりけり	やましろのゐでのたまみづてにくみて たのみしかひもなきよなりけり	山しろのゐでのたま水手にむすび たのみしかひもなき世なりけり

右歌句の第三句「てにくみて」と「手にむすび」とでは意味上に異同は来たさないが、古今六帖五にも

山しろのゐでのたまみづてにくみて

たのめしかひもなきよなりけり(書陵部宮蔵御所本注宮本)

と通具本本文と同一であり、勢語伝本も、広本系の大島本・神宮本・阿波本・塗籠本・為家本(参考伊勢物語)、それに伝慈鎮為家本・伝良経筆本・肖柏本・最福寺本等、すべて「くみて」と記す点において、「てにくみて」という本文系統が原形の流れを伝えているようにみなされるのである。

123	
A	B
のとならばうづらとなりて鳴をらん かりにだにやはきみかこざらん	野とならばうづらとなりてなきをらむ かりにだにやはきみはこざらん

右歌の第五句「きみか」と「きみは」の一字の異同であるが、右一首は古今集十八にも業平歌に対する読人不知の返歌として記載をみるところであるが、古今集本文に徴するに右部分を「か」と記すものは、基俊本・志香須賀本・雅俗山庄本・六条家本・後鳥羽院本等があり、(古今和歌集成 立論 資料編) 勢語伝本では広本系の大島本・泉州本・塗籠本・為家本(参考伊勢物語) 肖柏本・最福寺本が「か」と記す点より勘案するならば、通具本本文の恣意的改竄でないことが伺われる。古今集や勢語伝本の古形を伝えるものに「か」と記す点より、「か」の方が原形本文を伝えるのではないかという推定は十分根拠あるものといえるであろう。

筆者は本学教授・国文学